

Title	「工学研究科化学系図書室」誕生の記
Author(s)	富田, 知子
Citation	静脩 (2004), 40(3): 14-15
Issue Date	2004-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/37732
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

「工学研究科化学系図書室」誕生の記

桂キャンパス 工学研究科化学系図書室 富田 知子

おおよそ引っ越しというものは、それが個人のものであれ公のものであれ、多大な労力と資金、有形、無形の山のようなゴミ処理、準備不足からくる（どれだけ用意周到にしていたつもりでも必ず不備はつきものである）後悔、そして将来に対する不安や期待などなど、一時に10年分程のエネルギーを要求されます。

2003年6月末から9月初めの2ヶ月間かけて、「工学研究科化学系」が桂キャンパスに移転してきました。この大きな変動の波間をさ迷いながら「工学研究科化学系図書室」が誕生しました。気がつけば、500平方メートルの図書室に職員は1人で、「お引っ越し」の全てを背負って右往左往している只中に、附属図書館情報管理課から「静脩原稿依頼」という名の命令らしきものがきました。

テーマは「桂新キャンパスの図書室について」ということですが、「工学研究科化学系図書室」は6専攻（材料化学、高分子化学、合成・生物化学、化学工学、分子工学、物質エネルギー化学）で構成されています。図書室はワンフロアで、明るくゆったりしていて、集められた図書資料は全て開架式で一望出来、利用者には好評です。入り口の広いロビーに並べられたカラフルなソファがコンクリートの壁に映えています。ということで、何はともあれ実際に見ていただくに越したことはありません。

図書室の蔵書構成や内容、利用方法については、10月初めに出しました「利用案内」を見て下さるなり、電話等でお問い合わせ戴くなりして下さい。

肝心の「化学系図書室」の理念ですが、これを掲げられるほど議論を重ねてはおりません。しかし、激しく変動する社会の中での大学の有り様、その大学での図書館（室）の役割は、大

変厳しいものがあります。当然「化学」分野の独自性も考えなければならないと思いますし、過去を踏まえながらどのように変化し、如何に変化しないでおくのか難しい選択を迫られることもあります。

ここ数年における電子媒体の増加は著しいものがあります。「化学系」における購入雑誌については2003年からその多くを電子ジャーナルに切り替えました。それらは利用者には大変便利であるし、また図書室にとっても物理的に場所をとらないことや、冊子体に付随する諸々の管理業務からは開放され、軽減されるといったメリットは大きいものがあります。しかしながらデータベースや電子ジャーナルには、その便利さと引き換えに莫大な経費が必要となり、その経費を巡って該当専攻科や学部間での調整や負担金配分といった従来なかった事務業務が増えることになりました。

例えば化学分野のデータベースであるSciFinderや、電子ジャーナル、冊子体の経費負担について、その分担方法や分担金の計算でここ数年教官および、職員がどれだけの労力を費やしてきたことでしょうか。年々増大する金額を前にして、その負担金の配分の難しさに徒労感ばかりがつのります。そしてまた、昨今のウイルス攻撃や不正利用などのWeb上での出来事をみていると、将来に亘って安全に維持することへの不安と困難さも感じてしまいます。

研究のスピードから雑誌ばかりに気が取られている昨今ではありますが、図書室での専門図書（単行本）の充実は、是非とも必要なことです。新図書室は、この点では余りにも貧弱です。何しろ3図書室（化学工学、物質エネルギー化学、合成・生物化学）で所蔵していた研究用図書をかき集めてきただけですから・・・。新図

書室が出来て数ヶ月ですが、そんなお粗末な内容にも関わらず多くの利用者がいます。これらの専門図書を整理し、さらに充実させていくというのがこれからの大きな仕事でもあります。

現場で教官、学生と接していると、化学を研究している人の世界がもっている空気が伝わってきます。膨大なデータベースを駆使しながら日々格闘しているのであろうことを思うと、正直大変な世界になってしまったと思ってみたりもします。常に他人の研究内容をチェックしなければ自分の研究が進められないといったことも聞きます。厳しい世界ではありますが、「競争原理」や「効率」ばかりが重視されるのであればあまりにも寂しいことです。

世界がどんなに変動しても、というより変化が激しいほどその状況をしっかり理解しなければならぬと思います。書籍にじっくり向き合う人の為に、やはり司書の役割は重大であることもまた変わりないはずです。人事異動の激し

い昨今ではありますが、逆に化学分野の図書室（合成・生物化学）に長くいたことが、強みになるようころしたいものです。

さらに、「開かれた図書室」、「情報発信する図書室」といった難しい課題もあります。

なにはともあれ、「化学系図書室」が新しい地・綺麗な建物に生まれ3ヶ月、規模も適宜で、運営も軌道にのりつつあります。

過去、現在、未来が混交する中で日々翻弄されている私ではありますが、日常性を突き破られいろいろ考えさせられる生活を送れることは幸せな廻り合せだったのかも知れないと、最近思っております。

職員は1人だと述べましたが、実は多くの方々に助けていただいております。特に工学部図書掛の方には吉田に残してきた雑誌の整理や後片付けや2004年の準備等、多大なお世話になり感謝しております。

2003.11.25

(とみた ちかこ)



桂地区
Aクラスター



化学系図書室